

令和7年度 英語科及びデジタル科実施状況について

(別紙2)

金沢市立三馬小学校

①児童アンケート

(1)英語科(小学校5年生:令和8年1月実施) (%)

		そう思う	どちらかと言えば そう思う	どちらかと言えば そう思わない	そう思わない	無回答
問1	英語科の勉強が好きだ。	33.0	46.0	17.0	4.0	0.0
問2	英語科の勉強は大切だ。	81.0	18.0	1.0	0.0	0.0
問3	英語科の授業の内容が分かる。	36.0	51.0	10.0	3.0	0.0
問4	先生や友達に英語で質問することができる。	22.0	51.0	20.0	7.0	0.0
問5	先生や友達の英語の質問に英語で答えることができる。	21.0	45.0	28.0	6.0	0.0
問6	アルファベットの大文字が書ける。	79.0	19.0	2.0	0.0	0.0
問7	アルファベットの小文字が書ける。	70.0	22.0	8.0	0.0	0.0
問8	教科書やピクチャーディクショナリーの単語や英文を書き写すことができる。	52.0	31.0	15.0	2.0	0.0
問9	教科書の単語や英文を読むことができる。	28.0	48.0	20.0	4.0	0.0

(2)デジタル科(小学校1～6年生:令和8年3月実施)

		そう思う	どちらかと言えば そう思う	どちらとも言えない	どちらかと言えば そう思う	そう思うわない
問1	自分やみんなのことを考えてICTを使うことができる。	52.4	29.5	15.3	2.0	0.8
問2	生活の中で上手にICTを使うことができる。	51.1	27.6	16.0	4.3	1.0
問3	深く広く学習するためにICTを使うことができる。	51.1	28.4	16.8	2.9	0.8

②指導改善の具体策

【英語科】 本校児童は「英語の勉強は大切だ」という肯定的評価が99%に達しており、学習意欲は極めて高い。一方で、英語での「質問」や「応答」については肯定率が約7割に留まっており、意欲と技能の定着の乖離が課題である。よって、以下の3点を具体の手立てとする。 ◇ICTや掲示物を活用した「学習の土台作り」 児童全員が活動内容を理解できるよう、視覚支援を活用して学習のスタートラインをそろえる。 ◇「モデリング」による不安の払拭 やり取りへの不安を解消するため、活動の途中で「上手なやり取りの例」を共有し、具体的イメージを持たせる。 ◇「ふり返り」の充実と学びの自覚化 終末場面で、「どのようなフレーズを使えたか」「相手の話のどこが理解できたか」を具体的にふり返り、学びの蓄積を図る。
【デジタル科】 本校児童は、全ての項目において肯定的評価が約80%に達しており、ICT活用に対して高い自信と肯定的な意識を持っている。一方で、いずれの項目でも「どちらとも言えない」が15%以上を占めており、ICTの理想的な活用イメージを掴みきれていない層が一定数存在するといえる。そこで、まずは児童自身が「みんなが楽しく正しく使うためのルール」を話し合う場を設定するなど、主体的な活用への意識を高める手立てから実践していく。

③学校関係者評価

【英語科】 金沢市を訪れる多くの外国人観光客の姿を、生きた教材として捉えたい。大人でも勇気が要ることだが、子供たちが「学んだ英語で話しかけてみよう」という意欲を持てるようになることが大切である。 そのためには、授業の中で「自分の英語が通じた」「質問に答えてもらえた」という小さな成功体験を積み重ね、心理的なハードルを下げるのが重要である。スモールステップで「通じた」「楽しい」という実感を得ることから始め、その喜びを学習意欲、さらには日常場面での「必要感」へと繋げていってほしい。
【デジタル科】 ICTの活用に関しては、まずは子どもたちに「理想の姿」を示すことが重要なのではないか。大人であっても、どのような活用が理想的なのかを完全には把握しきれていないのが現状。「ルールを守ること」が理想なのか、それとも「主体的に活用の幅を広げること」が理想なのか、先生たちが迷わないための明確な指針を作るのも一つなのではないか。